

# ふくいのミュージアム

1999.3.31

No. 35



灰釉四耳壺(瀬戸焼) 13世紀

# むらはずれの 題目供養塔

坂本育男

鯖江市や武生市の農村部の道を通ると、ときどき道路の脇に立つ笠塔婆を見ることがあります。笠塔婆は四角の石柱の頂に宝形造りの屋根をのせた一種の卒塔婆です。城郭の石垣のような基壇上に立つものもあれば、地面に直接立てたようなものもあります。

近づくると正面には独特な字体で「南無妙法蓮華經」とあり、側面には「天下泰平五穀豊饒」と彫られているかもしれません。「南無妙法蓮華經」は日蓮宗系の各宗派(以下では簡単に「日蓮宗」と書きます。)では題目と呼び、独特な書き方は俗称ですが「ひげ題目」または「はね題目」といいます。もとの文字はかなり固い字体ですが、文字からはねるように線が出ており、題目が光明を放つ様子を表していると考えられています。笠塔婆は五輪塔の地輪が文字を多く書くために長く延びたとも言われ、日蓮宗が特に大切にしてきたものです。そして路傍の笠塔婆は題目を唱える、または造塔という供養の行為を示しているものです。

それにしても、なぜ題目と「天下泰平五穀豊饒」が結びつき、村はずれに立てられるのでしょうか。さらに、このような題目供養塔はいつ頃立てられ、どれくらいあるのでしょうか。わたしはたまたま「供養」をキーワードにした情報の収集に関わることになり、改めて題目供養塔について調べてみました。まだ初期の段階ですが、いくつかの内容をお知らせしたいと思います。

題目供養塔は日蓮宗の造形物ですから、日蓮宗の寺院

題目供養塔(宮崎村寺)



が多い鯖江市から南条町の間にあるものを探し、形、銘文、立っている場所、簡単なサイズの記録を作りました。短期間ですが70余りの供養塔についてデータを集めることができました。

題目を彫った石塔にもさまざまな形があります。題目は墓石にも刻むからです。ただ墓石の場合は笠塔婆形はそれほど多くありませんし、墓石としての笠塔婆は題目の文字が小さく、代わりに多数の法名や命日が書かれていますからだいたい区別することができます。墓石以外は圧倒的に笠塔婆になります。一字一石経などを納めたものは層塔と宝塔を合わせたような複雑な形をしていて71基のうち3基だけ、自然石の片面を平らにして題目を書いたものと笠を持たない石柱の形をしたものは合わせて6基です。寺の境内で祖師の供養のために建立されたものでは、ほぼすべてが笠塔婆だと思います。日蓮宗の笠塔婆の重視がよくわかります。

寺の笠塔婆はどんなものか、武生市家久町の本承寺の例を見ましょう。まず門の前に昭和45年改建の笠塔婆があります。他宗だったら標柱にするようなものです。境内に入ると本堂の前に一字一石経を納めた塔と並んで5基の笠塔婆があります。軍人の顕彰のためのものと延宝5年、安永7年、明治14年、明治19年の紀年銘のものです。明治14年銘の笠塔婆は

正面：南無妙法蓮華經 右側面：南無日蓮大菩薩

左側面：題目五千部成就 裏面：明治十四年巳十月日造立／奉為宗祖大士六百歳報恩 当山十九世日啓並惣檀中 敬白

とあります。日蓮上人の600回遠忌の法要で題目を5000回唱え、遠忌を記念して(あるいは遠忌にあわせて)塔を建てた、ということになります。遠忌法要は多分寺で行われたでしょうから、境内に立てるのはもっともなことです。武生市塚町の一乗寺境内の元禄6年銘の笠塔婆は「南無妙法蓮華經 一万部成就」とともに「是人於仏道 □(必か)定無有疑」という偈を記し、道場としての寺院にふさわしい内容といえます。

路傍の笠塔婆では偈を記したものは見ていません。路傍のものとは上記明治14年銘のものと同じようなものもあれば、題目と紀年銘だけのもの、「天下泰平五穀豊饒」をもつもの、なぜか「水修行」「眼病守護」を書くものなどバリエーションが少し広がります。

では路傍の題目供養塔が立てられたのはいつ頃でしょう

玄関の護符（鯖江市平井町）



か。表は建立時期と供養塔の立つ場所の関係を示したものです。時期区分は等間隔ではありませんが、1回の遠忌がだいたい含まれるように区切っています。寺院境内は僅かしか見ていませんから、数値はおよその傾向程度に見てください。それでも、①元禄以前の古いものは寺院境内に多く、村はずれにあるものはまれである。②建立数のピークがあるのは18世紀末、天保～弘化の間、明治の後半である。③寺院境内は明治後半以降はあまり立てられないらしい。④村はずれの供養塔が増加するのは18世紀の末以降などがわかります。また意外なほど明治以降に立てられたものが多いことがわかります。村にすむ人の余裕ができたことを示すものかもしれません。ところで遠忌を建立の契機とすることが予想されたのですが、碑文に遠忌を入れているのはほぼ3分の1でした。それに遠忌を名目にしていても塔の建立はたいへんばらついています。日蓮上人600回遠忌の場合、1843年から1891年の間に8基です。武生市北府4丁目の笠塔婆は3面が題目、裏面为天保6年の紀年銘だけというのですが、天保飢饉の死者の供養塔といわれ、板塔婆も十数枚おかれています。天保・弘化の塔には遠忌の文字をもつものではなく、この時期のピークは飢饉との関わりがあるかもしれません。

次に「天下泰平五穀豊饒」の文字をもつ塔は案外数が少なく、江戸時代の末と明治の後半に多いことに気がつきます。しかも、この文字をもつものはすべて村はずれに立てられたものです。「天下泰平」も機械的に記されると思いましたが、たいへんな間違いでした。題目を唱えるときもこれらの願いが込められていたという時代背景が考えられます。慶応元年に立てられた塔には「五穀豊饒」に代わって「国土安全」と書いたものもあるのです。

村のはずれに立つものは、個々のむらの信徒の集団・講中か個人が立てます。信仰を固めたり広めたりするためなら、村の辻の方が目的を達することができるでしょう。村はずれに立てるのは、供養塔に護符あるいは魔除けの役割を期待したと考えてよいでしょう。

鯖江市下河端町の嘉永5年銘の供養塔は「天下泰平五穀豊饒」の文字をもつとともに、若講中建立という興味深いものですが、集落の西のはずれ、水落へ通じる道の脇に

立っています。この道は下河端から西へ出るもっとも重要な道路だったようです。この位置に立つことによって、西から村へ入るものを、題目の力で威圧することができる、さらに大きな供養塔を建立する財力を誇示できると考えたのでしょう。むらはずれにある供養塔はすべてこのような場所が選ば

れています。

このように考えるのは、日蓮宗の檀家で玄関の戸口の上の木や紙の護符をおいているからです。上の写真は木製のものですが、中央に題目があり周囲には数多くの神仏の名が書かれています。単なる徽章でないことは言うまでもなく、「魔除けだ」とはっきり言った人もありました。村はずれの供養塔は題目だけでも、玄関の護符と同じ意味を持ち、境を守るものになるのです。

福井の近郊でも石の地藏がたくさんある地区があります。それらの地藏は村はずれか屋敷の入り口にあります。日蓮宗の檀家の多い地区へ入ると、地藏が全くないわけではありませんがあまり目につきません。その代わりに供養塔がある、と言えるでしょう。

供養塔の調査は始めたばかりで、十分な把握はしていません。基壇の作りかた、装飾もバリエーションがあります。日蓮宗の地区は真宗の地区と儀礼が異なることが知られていますが、それらも含めてさまざまな問題を秘めています。いろいろとご教示をいただけたら幸いです。

期間	建立場所	寺の境内	寺の門前	むらの中	むらはずれ	計	天下泰平
延宝～元禄	1673-1704	4			1	5	
享保～明和	1716-1772	3			1	4	
安永～寛政	1772-1801	2	3		6	11	1
享和～文政	1801-1830			1	3	4	
天保～弘化	1830-1848		1	3	6	10	4
嘉永～慶応	1848-1868		1	1	2	4	3
明治1～20	1868-1887	1		1	2	4	1
明治21～	1888-1912		2	2	9	13	3
大正	1912-1926		1		1	2	1
昭和1～20	1926-1945		3	1	1	5	
昭和21～	1945-		2		1	3	

題目供養塔の建立年代

# 第2次恐竜化石発掘調査

福井県立博物館では、平成元～5年度の第1次恐竜化石発掘調査に続き、第2次発掘調査を平成8～10年度に勝山市北谷町において行った。平成8年度(1996)の発掘は、第1次調査時の崖面よりさらに奥へ約10m掘り込んで約200㎡を新たに露出させ、足跡化石や骨化石の調査を行った。平成9年度(1997)は、発掘区を8年度より下流側へ広げ同じく約200㎡を、平成10年度(1998)もさらに200㎡の調査を行った。

発掘調査団は、福井県立博物館の学芸員と資料調査員などを中心として組織された。あわせて地学系の大学生や大学院生なども全国から加わった。この3年間で発掘に参加した延べ人数は約2,000人を、また発掘された化石標本は、恐竜のものだけで1,500点を数えることとなった。この他、カメラワニ化石、植物化石や軟体動物化石など多数を発掘している。

発掘に先立ち、平成7年にまず恐竜化石包含層の上位の地層を除去する土木工事をして、重機で化石包含層の地層面を広く露出させた。このように地層に平行に面を露出させていく「層面法」という方法を、第1次発掘調査から行っている。これにより、化石相互の位置関係や分布状況を詳細に把握し、研究データの一つとしている。具体的な発掘の手順は、まず小型の重機を使い、岩のひびに沿って岩石を大きく取り外しながら、化石の有無を確認する。化石は周囲の岩と色が似ており、一見しただけでは判別がつかない場合があり、表面に付いた泥などを洗ながら丹念に探す。化石が発見できなかった岩石は、別の調査員らによって丹念にハンマーで割られていく。岩の中に化石が埋もれている可能性があるためである。このようにして発見された化石には、発掘地点や発見者などの記録をつけられる。この記録は、化石の分布状態などを調べるための大切なデータである。採集された化石は岩石に埋まっている状態で、博物館に運ばれてくる。これらは、クリーニングと呼ばれる作業により、ていねいに岩の中から取り出される。このような過程を経て、ようやく化石は、研究が可能な状態となる。

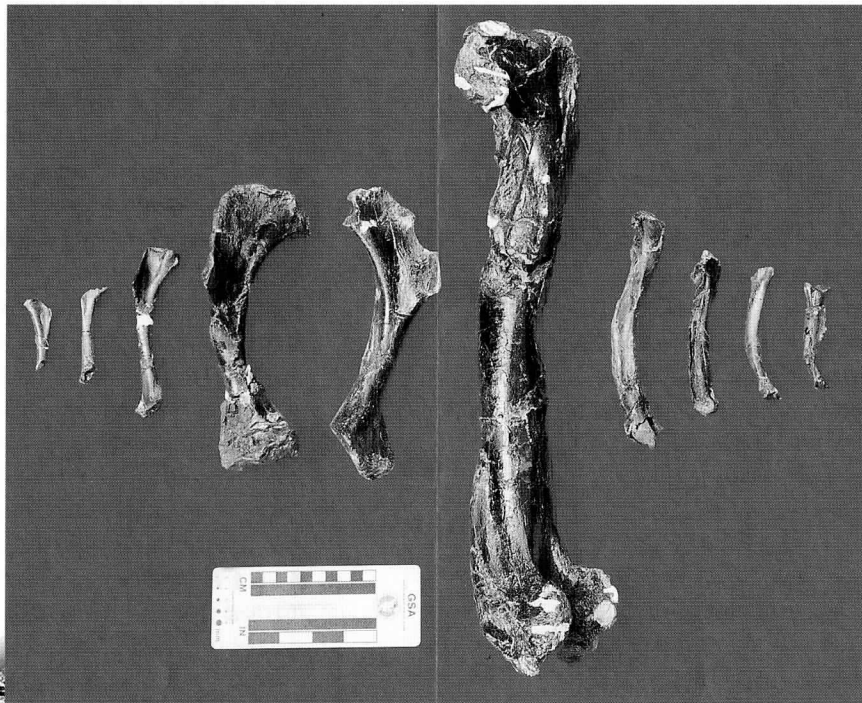
## 平成8年度発掘成果

第1次調査の5年間で約300点の恐竜化石を発掘していたが、この年だけでそれと同程度の化石を発掘することができた。これはボンベッド(骨化石包含層)に到達したことを意味する。獣脚類や鳥脚類の肢骨がまとまって発見され、発掘現場が我が国数々の恐竜化石産地であることが裏付けられた。

また、第1次調査では未発見の部位であったイグアノドン類の上腕骨や大腿骨が発見された。第1次発掘の成果により、平成7年にフクイリュウ(イグアノドン類)の骨格が復元されていたが、この発見でより完全に近い形で修正復元できることになった。

さらにドロマエオサウルス類の前肢と後肢の主要な骨格を発見することができ、四肢に関してはほぼ復元が可能になったといえる。また、一般的なドロマエオサウルス類の恐竜の全長が1～1.5mなのに対し、福井のドロマエオサウルス類は推定全長が4～5mと著しく大型である。このような大型化したドロマエオサウルス類は、世界に3例しかなく、白亜紀前期における獣脚類の進化解明への重要な鍵となる可能性がある。

発掘調査風景



獣脚類の大腿骨と上腕骨(平成9年発掘)  
左5点/上腕骨(うち左4点は幼体)  
右5点/大腿骨(うち右3点は幼体)

## 平成9年度発掘成果

恐竜の骨化石は、前年の倍の約600点を数え、予想を上回る成果を得ることができた。中でもイグアノドン類の骨化石には保存状態が良い頭部の骨が多数あり、特に左下顎についてはほぼ完全な形になるものが見つかった。ともに発見されている前歯骨や左右の前上顎骨はこれと互いに関節する事から、同一個体のものである可能性が非常に高い。これらが発見されたことで、分類学的研究を進めやすくなった。

また、発掘後のクリーニング作業や研究によって、新たに小型獣脚類の「幼体」の異なる大きさの骨が発見された。これは、成長段階の異なる恐竜として我が国最初の発見例といえる。

発見された幼体の標本は、大腿骨が4点、上腕骨が3点である。前年までに発見されている標本を成体として比較すると、約60%、約40%、約25%の4つの成長段階があることとなる。またこれらの骨は、破損も少なく、良好な

保存状態であることから、恐竜が死んだ場所からの移動距離は、それほど大きくないと考えられる。これから手取層群分布地域において、恐竜が産卵し、成長していった可能性が考えられ、次第に恐竜たちの生活が見えるようになってきた。

## 平成10年度発掘成果

平成10年度は前年と同様、恐竜の骨化石だけでも約600点を発掘することができた。

平成9年度の発掘調査の際に、卵殻化石と思われるものが3点発見されていたが、断定できなかった。そこで、確証を求めて確認作業を行っていたところ、今年度の発掘でさらに約20点の卵殻化石が発掘され、しかもこれらが恐竜のものであることが確認できた。白亜紀前期の恐竜卵殻の発見事例は、世界的にみても極めて少なく、恐竜の卵の系統や時代的形態変化を研究する上で大きな発見と言えるだろう。

前年度に獣脚類の幼体とみられる大腿骨や上腕骨が発見されたが、今回も幼体のものと考えられる歯、後肢趾骨、末節骨が、新たに発見された。歯は極めて小さなものであるが、歯冠の前後には、極めて小さなセレーション(鋸歯)が認められる。小さな趾骨はこれまでに発見されているものの約40%の大きさである。

また竜脚類については、これまで歯ばかりが多数発見されていたが、今回初めて歯以外の体化石が発見された。発見されたのは、腰の骨である仙骨をつくる骨である。

現在も急ピッチでクリーニング作業を行っている。これにより新たな発見がまた期待される。

## まとめ

第1次発掘により手取層群分布域である福井県から、恐竜化石が数多く発見され、恐竜時代に恐竜がいたことが確認された。第2次発掘により、数多くの種類の恐竜やまた動植物が生きていたことが詳しく分かってきた。草食恐竜のフクイリュウ(イグアノドン類)や大型のドロマエオサウルス類の肉食恐竜などが生活し、産卵し、成長していったことが分かってきたのである。

発掘調査には、恐竜が生息していた当時の古環境を総合的に復元する、という目標がある。第2次調査により、この目標に向け大きく前進したと言える。つまり、古環境という「絵」の中に、生き生きとした恐竜の様子が、はっきりと描けるようになってきたということである。しかし全体としては、この「絵」はまだ未完成であり、様々な分野からのより総合的な研究が必要である。

発掘調査事業は、あと1年間継続され、クリーニング作業や研究がなされる。これらの作業により、「絵」の材料を少しでも多く出すために努力したい。(千秋利弘)

# ヨーロッパの絵馬 二景

## 笠松 雅弘

今回は、ヨーロッパにおける絵馬に関する二つの見聞を報告する。  
一つは、オランダのライデンに残るシーボルト・コレクションの中の絵馬、  
もう一つは、フランスのマルセイユの聖堂にある、  
絵馬によく似た 'ex-voto' についてである。

### 1 | オランダ、ライデンに残る 日本近世の絵馬

ライデンは、オランダの首都アムステルダムから電車で約30分ほど南西に下ったところにある。人口十万余りの小さな町だが、オランダ最古のライデン大学（16世紀創設）と、16か所もの博物館がある。ライデン大学には日本語学科が置かれ、親日度の高いところでもある。このライデンにある博物館の一つ、国立民族学博物館 (Rijksmuseum voor Volkenkunde) には、二万数千点ともいわれる日本関係の収蔵品が収蔵され、そのなかに彼の有名なシーボルト・コレクション（厳密には、同時代に収集されたブロムホフとフィッセルのコレクションを含む）がある。同コレクションはその一部が、1996年シーボルト生誕200年記念の展覧会でわが国にも紹介されている。そのなかに、近世の絵馬が含まれているのである（展覧会では出品されていない）。

1997年の夏、私が同館のマテイ・フォラー博士にみせていただいた絵馬は、全部で80余点におよぶ。ミニチュアと思われるものが半数近くを占めているが、残りは実際に使用された小型絵馬であった。

そして、そのうちの4点は、あきらかに東北（青森県）の七戸周辺に分布する「南部絵馬」であった。写真①と②とで比較して分かるように、絵柄の特徴、そのユニークな馬の構図からしてまちがいない。うち1点については、享保4年(1719年)に奉納されたことが確認されるが、他も

ほぼ同時期のものとみられる。

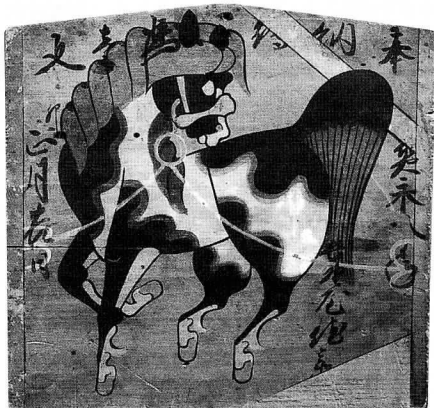
さらに、もう一つのグループは、おそらく大坂産の絵馬であると推定できる。これは、享保期(1716~36年)に越前で流通していたものとも同じ種類である。黄土あるいは胡粉を下地に塗り、浮世絵の「丹絵」を思わせるような墨と丹、またベンガラや緑青の顔料を用いて彩色されている。

写真③の「高砂図」の作品がその典型でもある。しかし残念なことに、安永期(1772~81年)以降、北陸で流通した福井産の夢楽洞絵馬は1点も確認することができなかった。

ところで、シーボルト・コレクションは文化・文政期(1804~30年)におもに特定の骨董品店を通して収集されたものといわれている。そうすると、すでに当時、絵馬が骨董品として売買の対象になっていたことになる。しかも、東北地方の絵馬までが全国的な骨董市場に流通していたということである。ちなみに、同コレクションのなかには、幕末や明治期に奉納されたものも含まれていた。この点からすると、一部は後年に追加収集されていることにもなる。

また、わが国の絵馬が見られる例としては、これ以外に、オーストリアのウィーンにある国立民族学博物館がある。ここでは、常設展示に4点が紹介されている。

そのうちの1点は、正保2年(1645)に奉納された古い時期の小形絵馬（やはり下地に胡粉を塗った文殊菩薩図）であり、絵馬の歴史を知る上では貴重な資料といえる。はたして、これらの絵馬はいつの時期に流失したものなのだろうか。



青森県七戸町の南部絵馬【写真①】



シーボルト・コレクションの南部絵馬【写真②】



シーボルト・コレクションの  
「高砂図」絵馬【写真③】



シーボルト・コレクション (絵馬の収納状況)

## 2 | フランス、マルセイユの ‘ex-voto’ 「難船絵馬」

マルセイユは、フランスの南西部プロヴァンス地方にあり、古くから地中海貿易で栄えた港町として知られている。そのマルセイユの港湾を見おろす山の頂きには、19世紀半ばに建てられたノートルダム・ド・ラ・ガルド寺院 (Basilique de Notre-Dame de la Garde、ガルドは守護の意味) がそびえたつ。

私は1999年1月にここを訪れたが、聖堂内部の壁面に多くの‘ex-voto’、すなわち油彩の絵額や軍隊の記章などの奉献物・奉献画が掲げられていることに驚かされた (写真④)。とくに絵額の場合は、聖母マリア像・船舶・戦場などの画題にそって大別され、各々がいくつかの壁面を使って整然と掲示されている。これらは、いずれも祈りが叶えられたことを感謝して、信者たちが捧げたものである。

このうち船舶画の多くは、写真⑤にみるような、海上でシケにあって遭難しかけた場面を描いている。和式・洋式の船形こそ異なるものの、わが国のいわゆる「船絵馬」、なかでも「難船絵馬」と呼ばれる絵馬 (写真⑥) の絵柄とそっくりである。無事難船を免れて帰還したことを感謝、記念して奉納するという、その心意までが共通している。戦時期、戦場の図や軍隊の記章などを帰還の礼に奉納するという慣習もまた、わが国では幕末期からよく見られたことであり、奉納する物品の内容も酷似している。

ヨーロッパにおいて、「難船」を描いた絵額を帰還に際して奉納するという慣習は、すでに17世紀にみられるらしい。「難船絵馬」に限ってみれば、わが国の事例はもっと後になるようだが、「船絵馬」の歴史としてみれば十分その時期にまでさかのぼる。はたして、西洋との交流 (い

ゆる南蛮貿易) が活発であった織豊期前後に両者の何らかの接点が見い出せないものだろうか。

ところで、絵馬を奉納することの動機について考えてみよう。往々にしてわが国の絵馬は、奉納者の「祈願」「希望」を表象するものとして理解されがちである。これは、幕末期から流行し昨今の受験生の間でも人気のある「祈願絵馬」については問題がない。しかし、他の多くの事例に当てはめるには少し無理が生じる。いま具体的な事例をもって検討する余裕はないが、絵馬を奉納する動機・意図は、やはり「感謝」「記念」とみる方が妥当な解釈といえる。「祈願」と「感謝」とは表裏一体の行為であるが、絵馬を奉納することが祈願 (先) に際して行われるか、感謝 (後) に行われるかという理解の差は大きい。本来、わが国の絵馬もマルセイユにみる‘ex-voto’と同じく神社・仏閣に掲げられる「感謝」の奉献物として考察を進めるべきなのである。いまはとりあえず‘ex-voto’と絵馬との類似性を指摘するにすぎないが、今後改めて関係資料の収集につとめ、両者の関連性を追究してみたいと思う。

ちなみに、私が写真に収めてきた‘ex-voto’は、ほとんどが20世紀に入ってからのものと思われる。

### ■参考文献

○マティ・フォーラー

「ヨーロッパにおけるシーボルト・コレクション」(「シーボルト父子のみた日本」1996)

○七戸町教育委員会『七戸町の文化財』1992

○石井謙治『図説和船史話』1983

(写真は裏面につづく)

マルセイユの旧港からみたガルド寺院



聖堂壁面に掲げられるex-voto(船舶画)【写真④】

聖堂内部(マリア像の後ろに船の絵がみえる)



フランスのex-voto(難船図)【写真⑤】



日本の難船絵馬【写真⑥】